

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
(著書(欧文)) 1.				
(著書(和文)) 1. 人間科学としての臨床心理学	共著	2004年5月	金剛出版 43-57頁	夜尿症の事例を用いて、子どものケースの見たて(心理査定)について考察した。第1部第4章「ケースの見たて」を担当。
2. 転換期の児童福祉臨床	単著	2005年1月	日本評論社、こころの科学119号 9-12頁	児童虐待への対応から、これまでの臨床心理学の枠組みから、より積極的な介入の必要性を論じた。
3. 地域社会における子どものウェルビーイング	共著	2005年4月	至文堂、現代のエスプリ453号 10-30頁	子どものウェルビーイングについて、座談会方式の中で、児童相談所の立場から検討した。
4. カウンセラーのための104冊	共著	2005年6月	創元社 54-55頁	三木善彦著「内観療法入門」について、書評した。
5. 子どもの身体が語る心のサイン	共著	2005年11月	金子書房、児童心理832号 16-21頁	不登校や児童虐待の子どもが示す身体症状を示し、そこからいかに心理的な問題を把握していくかについて考察した。
6. 軽度発達障害へのブリーフセラピー	共著	2006年7月	金剛出版 95-110頁	アスペルガー中学生のケースを用いて、ブリーフセラピーによるスクールカウンセリングのあり方について検討した。第1章5節「5. 学校生活になじめないアスペルガー女子中学生への支援」を担当。
7. 臨床に必要な心理学	共著	2006年11月	弘文堂 5-7、186-187、221-224、228-230頁	社会福祉士のテキストである「福祉臨床シリーズ」の第4巻の中で、第1章「一人の統合された人間としての心理学的な理解とは」(5-7頁)において、身体障害者の心理的理解について、先天性障害と中途障害別に考察した。第11章では「解決志向の心理療法・ナラティブセラピー」(186-187頁)で、心理療法の中の、解決志向アプローチとナラティブセラピーについて解説した。第13章では「専門職の理解と連携」(221-224頁)、「家族支援の視点と方法」(228-230頁)、「福祉臨床と臨床心理学」(221-224頁)を担当して、それぞれ専門職間の連携のあり方や、福祉臨床における家族支援のあり方のほか、福祉臨床における臨床心理学の位置づけについて検討した。
8. 年代別 子どものSOSは、こんなところに現れる	単著	2007年3月	PHP研究所、別冊PHP、49-55頁	子どもの発達段階に応じて示される、心身の不調や症状について解説し、家庭で保護者が気をつけるべき点について指摘した。
9. 親・教師の心の安定がほめ方・叱り方に与える影響	共著	2007年3月	金子書房、児童心理856号 18-24頁	しつけや教育における、親や教師の心理的状态の影響について、事例を通して論述した。
10. 日本の子ども虐待	共著	2007年12月	福村出版 27-51、117-127、257-288頁	戦後の子どもの危機的状況に関する文献研究を集大成した中で、特に事例研究を中心に整理し考察を加えた。
11. 子どもの救済とリーガルサポート	共著	2008年3月	ぎょうせい (加除式)	子どもに関する相談事例を中心に、その対応についてケースカンファレンスの形式を用いて記述し、福祉、行政、教育現場で対応に苦慮したときに利用しやすい事例集とした。
12. 心理学理論と心理的支援	共著	2008年11月	弘文堂 5-7、181-186、223-234頁	前著「臨床に必要な心理学」に加筆し、特にナラティブセラピーについて一章追加した。
13. 子どものメンタルヘルス	共著	2008年6月	金子書房、児童心理臨時増刊879号 116-122頁	「気をつけたい環境の変化」をテーマに、環境変化が子どもの心身にどのように影響するのか開設し、その対応について論じた。
14. 児童福祉法と少年法のはざま	単著	2008年10月	ぎょうせい、判例地方自治307 9頁	少年院法の改正に伴い、児童福祉法と関わりあう非行事例の取り扱いについて、その問題点と課題を考察した。

15. 学童期のメンタルヘルス	共著	2009年5月	ぎょうせい、現代のエスプリ503号 119-131頁	学童期の発達課題の一つである社会性について、その発達の意味と、その育成のための方略について論じた。
16. 臨床家族心理学	単著	2009年5月	福村出版 171頁	現代家族の心理的課題を、コミュニケーションの視点から考察し、学部学生から大学院生、また実際に臨床現場で仕事をしている臨床心理士や教師にとっても役に立つ家族心理学の内容を目指している。特に、コミュニケーション理論に基づく家族療法的な課題の解決方法は、臨床現場でも十分に利用可能な構成とした。
17. 子育てを楽しめる親になる	共著	2010年2月	金子書房、児童心理臨時増刊909号 109-114頁	児童虐待について、そのメカニズムと対応について、家族関係学の立場から論述した。
18. シリーズ 子どもの人間関係2 父親	単著	2010年6月	社会評論社、サクセス12 2010隔月刊 7・8月号、56-58頁	子どもの心の発達にとって、父親が果たす役割について、子どもの発達段階に応じて解説した。
19. シリーズ 子どもの人間関係3 きょうだい	単著	2010年8月	社会評論社、サクセス12 2010隔月刊 9・10月号、56-58頁	子どもの心の発達にとって、きょうだい果たす役割について、子どもの発達段階に応じて解説した。
20. シリーズ 子どもの人間関係4 友だち	単著	2010年10月	社会評論社、サクセス12 2010隔月刊 11・12月号、72-74頁	子どもの心の発達にとって、友だちが果たす役割について、子どもの発達段階に応じて解説した。
21. シリーズ 子どもの人間関係5 先生	単著	2010年12月	社会評論社、サクセス12 2011隔月刊 1・2月号、54-56頁	子どもの心の発達にとって、教師が果たす役割について、子どもの発達段階に応じて解説した。
22. 日本の子ども虐待第2版	共著	2011年2月	福村出版 27-51、117-127、257-288頁	第1版に加筆訂正を行い、戦後の子どもの危機的状況に関する文献研究を集大成し、さらに事例研究を中心に整理し考察を加えた。
23. 子どもの心に寄り添う	共著	2011年5月	金子書房、児童心理931号 103-108頁	「子どもを好きになれない親」をテーマに、児童虐待に走ってしまう親の心理と、その解決について論じた。
24. 発熱、チック、不登校・・・年代別 SOS サインの受けとめ方	単著	2011年11月	PHP研究所、PHPのびのび子育て 11月増刊号、48-52頁	子どもの示す問題行動や身体症状の背後にある精神的な問題を見立てることで、問題の未然防止が可能となるため、子どもからのサインの捉え方とその対応について解説した
25. 文科省検定済中学校教科書 技術・家庭 家庭分野	共著	2012年2月	教育図書 6-29頁	第1章の「家族と家庭生活」を担当。現代家族について、指導要綱に基づいて中学生に分かりやすく解説した。また、家族間コミュニケーションのあり方について、専門の家族心理学の立場から説明している。
26. 小学校五年生・六年生のこころと世界	共著	2012年6月	金子書房、児童心理臨時増刊951号 100-103頁	「心を育てる親子の距離感」のテーマで、環境と行動の関係性に基づいて、思春期を迎える子どもにとっての養育環境としての親のかかわり方について論じた。
27. 子どもの気になる性格とどう向き合う？	単著	2014年1月	子どもと私が育つ！ 楽しむ！ 育児情報誌 miku(ブライト・ウェイ) 10-11頁	行動的なdoingタイプとのんびりしているbeingタイプの子どもの性格を、母親の性格との相性によるかかわり方について、子どもの発達を踏まえてアドバイスを行った。
28. 自己顕示欲が強い子への対応	単著	2014年3月	金子書房、児童心理982号 113-118頁	自己顕示欲のタイプを3つに分けて、それぞれの子どもへのかかわり方について論じた。
29. 文科省検定済中学校教科書 新技術・家庭 家庭分野	共著	2016年2月	教育図書 6-29頁	第1章の「家族と家庭生活」を担当。現代家族について、指導要綱に基づいて中学生に分かりやすく解説した。また、家族間コミュニケーションのあり方について、専門の家族心理学の立場から説明している。

30. 子どもの気質は変わりませんが行動は変えられます	単著	2017年12月	主婦の友社、Baby-mo ベビモ2017-2018冬春号 第17巻第1号 通巻147号 54-55頁	子どもの気質タイプと母親の気質タイプの組み合わせによる、子どもへのかかわり方の留意点を整理し、気質を変えるよりもかかわり方を工夫することでの子どもの行動変容の可能性について論じた。
31. 心理学理論と心理的支援	共著	2018年1月	弘文堂 5-7、181-186、223-234頁	前著「臨床に必要な心理学」に加筆、修正を行った。
32. 孩子的性情不變，但行為可以改變	単著	2018年3月	『Baby-mo』ISSUE 133 (子親傳訊社) 66-67頁 香港	子どもの気質タイプと母親の気質タイプの組み合わせによる、子どもへのかかわり方の留意点を整理し、気質を変えるよりもかかわり方を工夫することでの子どもの行動変容の可能性について論じたものの中国語訳。
33. 『校長の判断』を支える学校内外の資源とその効果的な活用	単著	2022年4月	『中学校 No. 823 令和4』(全日本中学校長会)	スクールカウンセラーとしての勤務から見た学校長の判断に使える資源について、カウンセラーも含めてどのような活用が可能かを論じた。
(学術論文(欧文)) 1.				
(学術論文(和文)) 1. 児童相談所からみた家族問題	単著	1998年8月	日本家政学会編 家族関係学 第17号 23-32頁	児童相談所関わった児童虐待と不登校の2事例を分析し、その背景として現代家族の孤立化や家族サポートシステムの脆弱さについて論じた。また、急激な社会変化の中での家族援助として、コミュニティ心理学的援助やコーディネート機能の必要性を考察した。
2. 利用アプローチによる援助関係の変化	単著	2006年9月	日本催眠医学心理学会編 催眠学研究第49巻第2号 20-27頁	エリクソンの利用アプローチを用いることで、セラピスト・クライアント関係を変化させ効果的な援助につなげられることを、催眠療法を用いた3事例をもとに考察した。
3. 思春期例に対するスクールカウンセラーの役割	単著	2011年5月	精神科治療学編集委員会編 精神科治療学 Vol. 26 No. 5(星和書店) 619-625頁	スクールカウンセラーとして筆者が担当した性同一性障害のケースを基にして、学校での思春期例の見立てと対応について論じた。
4. 心の支援と家族関係	単著	2011年12月	日本家政学会編 家族関係学研究 第30号 89-97頁	非行事例を基にして、こころの支援について家族システム論の立場から考察した。
5. 状態・症状のアセスメント	単著	2013年8月	小児内科編集委員会編 小児内科Vol. 45 No. 8(東京医学社) 1414-1419頁	心理アセスメントの最前線として、同じような症状や状態像を示すケースの心理検査結果から、より詳細な鑑別査定を行っていく方法について示した。
6. 思春期心性の理解と支援	単著	2015年2月	小児歯科臨床 第20巻第2号 57-61頁	歯科診療における思春期患者とのコミュニケーションの取り方と共に、そこから見えてくる心理面への配慮について論述した。
7. 被虐待児の育ちを支える	単著	2015年3月	外来小児科 vol. 18 No. 1 76-81頁	認知行動療法について概説し、小児科の外来診療で被虐待児を診察する場合に認知行動療法の考え方や支援方法が、いかに有効であるかを検討した。
8. しつけ	単著	2017年6月	小児内科 Vol. 50 No. 6 東京医学社 977-980頁	小児科医が心の診察医として機能するために必要な親への心理支援(心理教育)のために、心理学的に「しつけ」はこれまでいかに論じられてきたのか、また具体的にはどのようなしつけが必要なのかをまとめた。
9. コロナ渦が子どもの心へ及ぼす影響とその支援の視点	単著	2021年6月	『小児歯科臨床 第26巻第6号』東京臨床出版	コロナ渦における子どもの心の問題と、小児歯科医が日々の診療の中で気を付けるべき点に関して、臨床研究をもとに考察し、さらに小児歯科領域での心理職の協働の意味についても検討した。

10. 妊産婦の自己決定を支えるために	単著	2023年3月	『茨城県母性衛生学会誌』第41号 茨城県母性衛生学会 64-67頁	現代の医療では、専門家からの十分な情報提供や説明を受けた上で、患者自身が治療方針や方法の選択に積極的にかかわる権利を持つことが重要とされてきた。そこには患者自身の自己決定が求められるが、実際に患者が高度な医療に対して自己決定できるかは疑問がある。特に妊産婦の既往帝切後の出産に関する自己決定はその後の家族・人生の選択でもあり複雑な要因が絡み合う課題である。そこで、リスクマネジメントによる自己決定教育の方法を用いて妊産婦の自己決定を支える可能性について論じた。
(紀要論文)				
1. 養父のいじめを契機に登校拒否を起こした事例	共著	1989年9月	厚生省児童家庭局 児童相談事例集 第21集 237-250頁	養父の虐待により心理的な不安定さを呈し不登校に陥った男子中学生に、行動療法的援助により児童の行動を変化させ、解決に至った事例から、治療構造の問題や技法選択の方法などを検討した。
2. 読字障害児に対する一指導事例	単著	1992年11月	厚生省児童家庭局 児童相談事例集 第24集 9-21頁	読字障害を主症状とする学習障害児への援助事例から、学習障害児の主症状に対する心理治療以外に、副次的に示される情緒障害への対応や、学校などの関係機関との連携や調整の仕方などについて考察した。
3. 秋田県における少年非行の動向～相談所での関わりから～	単著	1994年3月	秋田県中央児童相談所 紀要(創刊号) 47-52頁	児童相談所で関わった少年非行の事例を検討し、近年の少年非行の特徴と、その社会的背景について検討した。
4. 情緒障害児に対する催眠療法の実践について	単著	1995年3月	秋田県中央児童相談所 紀要 第2号 9-18頁	情緒障害を示し盗みや幼児への性的いたづらを繰り返していた中学生に、催眠療法を試行し自己認知の変容や自己効力感を高めることで、問題行動が改善した事例を検討し、催眠療法の効果と問題行動の背景などを検討した。
5. スチューデント・アパシーに対する認知行動療法の適用	単著	1996年12月	大阪市立大学児童・家庭相談所紀要第13号 143-155頁	大学生の問題として研究されてきたスチューデント・アパシーの概念が、中学生の不登校にも認められると考えられた事例から、アパシー構造の低年齢層への適応を検討するとともに、アパシーへの援助の一課程で、認知行動療法による関わりの効果について考察した。
6. ケース・マネジメントへの心理検査の活用～終結時ロールシャハ法を用いたケースを通して～	単著	2004年3月	文教大学臨床相談研究所紀要 第8号 11-24頁	終結時に行った心理検査の結果を、ケースフォローのために医師との連携でいかに用いていくかについて検討した。
7. 特別支援教育に対する小中学校教員の意識に関する調査研究	単著	2004年3月	文教大学人間科学部紀要人間科学研究第26号 55-66頁	特別支援教育が始まり、一般の教員が普通学級で対象児童生徒を教育していく上での問題点を、教員の意識を中心に調査を行い、小学校と中学校で教員の意識に差が認められることが分かった。また、これまでの指導経験が特別支援教育への意識に影響することが示された。
8. 解釈によるアセスメントの具体的な援助化について	単著	2005年3月	文教大学臨床相談研究所紀要 第9号 37-42頁	臨床心理学的な解釈仮説を、ケースへの助言としていかに用いるかについて考察した。
9. 地域社会における子どものウェルビーイング	単著	2005年4月	至文堂 現代のエスプリ453号 110-118頁	スクールカウンセラーとして関わったケースを通して、地域における子どものウェルビーイングへの支援体制について論じた。
10. 戦後日本社会の「子どもの危機的状況」という視点からの心理社会的分析(虐待の援助法に関する文献研究第2報:1980年代)	共著	2005年12月	子どもの虹情報研修センター紀要No.3 125-133頁	1980年代の児童虐待へのかかわりについて、厚生省の「児童相談事例集」を文献データとして分析し、虐待のタイプと児童相談所の支援方法などを検討した。
11. 夜尿症事例への催眠療法の適応	単著	2006年3月	文教大学臨床相談研究所紀要 第10号 31-38頁	夜尿症に対して催眠療法を適応した事例を通して、催眠療法の効果とそのメカニズムについて考察した。
12. 戦後日本社会の「子どもの危機的状況」という視点からの心理社会的分析(虐待の援助法に関する文献研究第3報:1990年代)	共著	2006年12月	子どもの虹情報研修センター紀要No.4 118-130頁	1990年代の児童虐待へのかかわりについて、厚生省の「児童相談事例集」を文献データとして分析し、虐待のタイプと児童相談所の支援方法などを検討した。

13. 軽度発達障害者への就労支援事例～援助関係の形成と効果的援助のあり方について～	単著	2008年3月	臨床相談研究所紀要第12号、文教大学 3-11頁	長く引きこもりを続けてきた成人の発達障害の方に対して就労支援を行った事例をとおして、発達障害者への援助のあり方を論じた。
14. 虐待の援助法に関する文献研究(第4報:2000年～2006年まで)～戦後日本社会の『子どもの危機的状況』という視点からの心理社会的分析～	共著	2008年12月	子どもの虹情報研修センター紀要No.6 154-199頁	2000年から2006年までの児童虐待へのかかわりについて、国内の虐待関連の文献データとして分析し、虐待のタイプと各機関の支援方法などを検討した。
15. クライアントを困らせることの臨床的意義について -非行傾向のある高校生への援助から-	共著	2011年3月	常磐大学心理臨床センター紀要 第5号 13-19頁	支援困難事例に主訴とは全く別の問題でクライアントに困ってもらうことで、新しい相談ニーズが生じ支援に結びつくことを、非行事例を基に検討し考察を加えた。
16. 発達障害児・者への援助における『見立て続けること』の意義について	共著	2012年3月	常磐大学心理臨床センター紀要 第6号 25-32頁	心理査定は、ケース開始時にの早い時期に行うことは最も大切であるが、支援を続けている間も常に査定を続け、支援や対応を変化させていくことが必要である。特に、支援的介入により変化が起きやすい発達障害への対応では、見立てし続けることが大切であることを、ケースを示しながら検討した。
17. 児童養護施設における心理検査の活用に関する一考察 -検査結果のフィードバックによる職員の児童理解を指標として-	共著	2013年3月	常磐大学コミュニティ振興学部紀要 コミュニティ振興研究 第16号 55-110頁	児童養護施設において保育士や児童指導員といった直接指導職員の児童理解促進のために、心理検査の結果を心理職がどのように伝えることがよいか実証的に検討した。
18. 絵本の読み聞かせによる母親の育児不安低減効果の研究	共著	2013年11月	常磐大学心理臨床センター紀要 第8号 3-11頁	絵本の読み聞かせが、母親の育児ストレスをいかに軽減するか、実験的方法によって明らかにした。
19. 状態・症状のアセスメント	単著	2013年8月	小児内科 Vol.45 No.8 東京医学社 1414-1419頁	小児科医が日常診察場面で出会う身体症状の裏に隠されている心理的な問題についての診察(アセスメント)方法について、心理臨床家の視点から論述した。
20. 心理支援における援助関係の構築とその維持についての工夫 -催眠法を適用した事例を通しての検討-	共著	2014年3月	常磐大学心理臨床センター紀要 第6号 25-32頁	心理支援におけるセラピストクライアント関係に注目し、カスタマー関係の形成段階だけではなく、セラピー継続中にその関係を維持していくための工夫について、催眠法の特徴から論述した。
21. 効果的効率的な催眠法利用の工夫 ～身体表現性障害事例を通しての検討～	共著	2015年3月	常磐大学心理臨床センター紀要 第9号 3-8頁	効果的な心理療法の構築に向けて、身体表現性障害のケースに対して行った催眠療法の効用と限界について考察した。
22. 内的ワーキングモデルの行動論的検討	共著	2015年3月	常磐大学心理臨床センター紀要 第9号 9-14頁	内的ワーキングモデルは、現在問題となっている児童虐待での愛着障害などと絡んで研究が盛んになってきている。しかし、その多くが臨床的、あるいは認定的な側面からのアプローチである。そこで、本稿では行動論的な視点で内的ワーキングモデルについて検討を行った。
23. 過剰に我慢している子が出すサイン-学校、家庭での気づきと支援	単著	2015年10月	児童心理 No.1010 金子書房 92-96頁	過剰適応児がその後の生活の中で精神的な不適応を示すことはよく知られているが、過剰適応しているときには周囲の大人はその問題に気づき難い。そこで、学校や家庭で過剰適応をいかに発見し、適切な対応を行うべきかについて事例をもとに考察を行った。
24. 歯は口ほどに物を言い～口の中に映る家族の風景～	単著	2016年1月	小児歯科臨床 第21巻第2号 日本小児歯科学会編 12-20頁	小児歯科医が日常診察場面で見逃しやすい児童虐待の兆候について、事例を踏まえながら診察中に注意すべき視点を、口腔内の症状のみならず、患児の行動からも捉える必要性とそのポイントを論述した。

25. 文献紹介『Fumie Kumagai・Masako Ishii-Kuntz (Eds.) “Family Violence in Japan A Life Course Perspective”	単著	2016年12月	『家族関係学 No.35』 一般社団法人 日本家政学会家族関係部会	学会誌に書評を掲載（書評論文としては、33にまとめている）
26. 学校保健の担い手である養護教諭がスクールカウンセラーに期待する役割の一考察	共著	2017年3月	常磐大学コミュニティ振興学部紀要 コミュニティ振興研究 第24号 1-28頁	スクールカウンセラーが学校内で共同しなければならない職種の中心的役割を担うものが保健室の養護教諭である。スクールカウンセラーが効果的に役に立つ学校臨床を展開するためには、養護教諭がどのような期待と要望をカウンセラーに持っているのかを把握する必要がある。今回は調査研究により養護教諭が抱くカウンセラーへの期待についてまとめた。
27. 高等学校	単著	2017年5月	小児内科 Vol.49 No.5 東京医学社 686-689頁	学校種による心理的問題の違い小児科医が把握するために、幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校に分けてまとめたシリーズの、高等学校領域について依頼されて執筆した。義務教育とは故田尾なる高等学校の特殊性とともに思春期と早期青年期というマージナルな社会的位置づけからくる心理的問題について論じた。
28. カウンセラーは『叱る』をどう考えるか	単著	2018年6月	児童心理 No.1044 金子書房 112-118頁	児童虐待の相談受付研修の増加にともない、親業の必要性が強調されるようになってきたが、精神論ではない具体的な子どもへの対応、しつけの方法などについてはあまり論じられてきていない。そこで、子育ての中心となる「叱る」について、カウンセラーはどう考え実際にはどのように「叱る」のかを事例をもとに考察し、論じた。
29. 親子で取り組む発達課題～その達成とつまずきがもたらすこと～	単著	2020年1月	『保育と保健』Vol.26 No.1 日本保育保健協議会（日本小児医事出版社）	保育士と小児科医が日々の保育や診療の中で活用できる心理的発達課題についてこれまでの臨床研究からまとめ直し、その課題の未達成の弊害についても論じた。さらに発達課題を保育士や小児科医が保護者とともに達成していくための方策と、この領域における心理職との協働についても考察した。
30. 現代社会における父性	単著	2020年3月	『茨城県母性衛生学会誌』第38号 茨城県母性衛生学会	産婦人科領域で仕事を行う医師、看護師、保健師、助産師などが、母子支援のために必要な家族の視点について、「父性」の側面を社会要因も含めて検討を行った。加えて、医療現場におけるバターナリズムについての考察と、産婦人科領域における心理職との協働についても考察した。
31. 日本の家庭内暴力：ライフ・コースの視点から	単著	2021年3月	『人間科学』第38巻 第2号 常磐大学人間科学部紀要	“Family Violence in Japan A Life Course Perspective” の書評論文。特に日本で初めてセルフネグレクトについて触れていることの意味について論評した。

(辞書・翻訳書等)				
1. 心理臨床大辞典	共著	1992年11月	培風館	知能指数について、その定義と測定法、及び意味について記述した。第4部「知能指数」(454-456頁)を担当。
2. カウンセリング辞典	共著	1999年2月	ミネルヴァ書房	信頼性とパーセンタイル値についてその定義と意味について記述した。「信頼性」(329-330頁)と「パーセンタイル値」(493-494頁)を担当。
3. 家政学事典	共著	2004年7月	朝倉書店	児童相談所で把握している、児童虐待の実態と、国の虐待対応について解説した。「児童虐待の実態とその支援システム」(149頁)を担当。
4. 臨床心理学入門事典	共著	2006年4月	至文堂 314, 318頁	第6章の人物の項目の中で「ビネー」(314頁)と「ボウルビィ」(318頁)の2名について、その生い立ちと業績について解説した。
5. こころの問題事典	共著	2006年6月	平凡社 89、332、334頁	「虐待」(89頁)では、特に児童虐待について、その要因と対策について論じた。「過食と拒食」(332頁)では、摂食障害のメカニズムと援助のあり方について論じた。「引きこもり」(334頁)では、社会的引きこもりの理解とその対応について論じた。

(報告書・会報等)				
1. あの手この手を使って、成長を支える	単著	2005年1月	武蔵国際総合学園、ほっとLine 2005新春号 vol.11、2-3頁	不登校生徒への支援方法
2. 戦後日本社会の『子どもの危機的状況』という視点からの心理社会的分析（虐待の援助法に関する文献研究第2報：1980年代）	共著	2005年9月	子どもの虹情報研修センター、平成16年度研究報告書、14-23頁、47-56頁	1980年代の児童虐待へのかかわりについて、厚生省の「児童相談事例集」を文献データとして分析し、虐待のタイプと児童相談所の支援方法などを検討した。

3.	戦後日本社会の『子どもの危機的状況』という視点からの心理社会的分析（虐待の援助法に関する文献研究第3報：1990年代）	共著	2006年3月	子どもの虹情報研修センター、平成17年度研究報告書、42-64頁	1990年代の児童虐待へのかかわりについて、厚生省の「児童相談事例集」を文献データとして分析し、虐待のタイプと児童相談所の支援方法などを検討し、論文にするためのデータ集とした。
4.	家庭教育とPTA（第4分科会助言者）	共著	2006年8月	第56回 全国高等学校PTA連合会大会報告（秋田大会）』 76頁	家庭教育とPTAをテーマに各校が行った取り組みの報告に対して家族心理学の立場から助言を行った。
5.	対応の難しい保護者について	単著	2007年7月	子どもの虹情報センター、地域虐待対応等合同研修（アドバンスコース）用ビデオ教材	いわゆる困難事例に対する市町村や児童相談所などの対応の仕方について講義し、それをビデオ教材とした。
6.	家庭教育とPTA（第4分科会助言者）	共著	2007年8月	第57回 全国高等学校PTA連合会大会報告（埼玉大会）』 150-167頁	家庭教育とPTAをテーマに各校が行った取り組みの報告に対して家族心理学の立場から助言を行った。
7.	ココロの特集 子どもの『甘え』と親の『甘やかし』	共著	2007年9月	早稲田アカデミー、サクセス12 VOL. 8、21-26頁	しつけにおける甘えと甘やかしの関係を、子どもの心の発達への影響の視点から解説した。
8.	親と子の 悩み相談コーナー	単著	2007年11月	早稲田アカデミー、サクセス12 VOL. 8、36頁	親の悩みに対して、Q&A方式で解説した。
9.	ココロの特集 怒りやすい子 怒らない子	共著	2008年1月	早稲田アカデミー、サクセス12 VOL. 10、28-31頁	怒りやすい子と怒らない子の心理について解説し、それぞれのタイプへの親のかかわり方を示唆した。
10.	ココロの特集 がまんできる子、できない子	単著	2008年5月	早稲田アカデミー、サクセス12 VOL. 12、24-27頁	がまんできる子とできない子の心理について解説し、それぞれのタイプへの親のかかわり方を示唆した。
11.	シリーズ 子どもの人間関係① 母親	単著	2010年5月	早稲田アカデミー、サクセス12 Vol. 24、24-26頁	子どもの心の発達にとって、母親が果たす役割について、子どもの発達段階に応じて解説した。
12.	保護者による生徒虐待の発見とその対応法	単著	2011年5月	埼玉県高等学校教育相談研究会 研究紀要第30号、8-14頁	高等学校で教師が生徒の虐待に気づく視点と、気付いた後の対応について解説した。
13.	学校・家庭・地域社会との連携の在り方『児童虐待への対応』	単著	2010年12月	独立行政法人 教員研修センター、平成22年度 健康教育指導者養成研修（西部ブロック）、119頁	児童虐待に対して、学校・家庭・地域がいかに連携していけばいいのか、実際の事例を通じて解説した。
14.	子どもからのサインをどう受け取るか～子どもの心と家族のコミュニケーション～	単著	2012年3月	三重県高等学校養護教諭研究会 研究集録No. 11、15-19頁	生徒が示す様々な問題行動の裏に隠されている、子どもたちからのSOSサインについて解説した。
15.	支援の困難な児童問題を抱えた家庭に対するアプローチの仕方～虐待・不登校を見据えて～	単著	2013年1月	西東京市四者協議会だより	児童虐待に対して、学校・家庭・地域がいかに連携していけばいいのか、実際の事例を通じて解説した。
16.	人とのかかわりが苦手な子どもたちへの対応	単著	2013年3月	『平成24年度 秋田県小・中学校生徒指導研究集録 第42集』 秋田県生徒指導研究会	発達特性を有する児童生徒への対応の仕方について解説した。
17.	子どもの心の発達と体力向上への支援	単著	2013年3月	『川口市児童生徒の体力向上をめざして 第34集』 川口市児童生徒体力向上推進委員会	教育職員に心理的発達と体力向上との関連性について解説した。
18.	思春期の発達課題と対応～思春期の子どもとその親支援のために～	単著	2013年11月	『第13回 思春期の臨床講習会 講演要旨集』 一般財団法人日本小児科医会	小児科医の研修教科書として作成

19. いろいろな問題を抱えた家族とのかかわり	単著	2013年11月	『平成25年度 主任児童委員セミナー 要覧』一般財団法人埼玉県民生委員・児童委員協議会	主任児童員の研修資料として作成
20. 診療に役立つ認知行動療法	単著	2014年7月	『第16回「子どもの心」研修会後期講演集』（公益社団法人日本小児科医会）	小児科医の研修教科書として作成
21. 家族カウンセリングの理論と実践	単著	2016年9月	『第4回「子どもの心」研修会導入編 講演集』（公益社団法人日本小児科医会）	小児科医の研修教科書として作成
22. 一歩踏み込んだ他機関連携をするためのコツ	単著	2018年12月	「平成30年度母子保健指導者養成研修会『子どもの心の診療医』養成研修」厚生労働省	小児科医の研修教科書として作成
23. 乳児期からの心の発達 ～その課題とかわり方～	単著	2019年5月	『第21回「子どもの心」研修会前期講演集』（公益社団法人日本小児科医会）	小児科医の研修教科書として作成
(国内学会発表)				
1. 老人の生活適応について	共同	1984年9月	東北心理学会第38回大会	養護老人施設入所者の適応行動尺度（ABS）の結果を検査し、高齢者の生活能力の特徴を考察した。
2. 地域住民の高齢者問題への意向	共同	1984年9月	東北心理学会第38回大会	高齢者問題について、中年層を対象にその意向について調査し、居住地や回答者の属性によるニーズの違いを考察した。
3. 施設処遇老人の生活適応状況	共同	1985年9月	東北心理学会第39回大会	特別養護老人施設入所者に、ABS（適応行動尺度）を試行し、生活能力の特徴を属性との関連で考察
4. 老年期の心理的検討〔Ⅳ〕～健常高齢・施設老人のバウムテストの特徴～	共同	1986年	日本心理学会 第50回大会	施設入所している特に知的に問題の認められない健康高齢者のバウムテスト結果をもとに、バウムテストに現れる高齢者の心理的特徴を検討
5. 老年期の心理的検討〔Ⅴ〕～精神症状を呈する高齢者のバウムテストに見られる変化～	共同	1986年	日本心理学会 第50回大会	施設入所している痴呆症状を示す高齢者のバウムテスト結果をもとに、痴呆高齢者の心理的特徴を検討
6. Ambiguity Toleranceの程度と適応性	単独	1988年9月	東北心理学会 第42回大会	曖昧さに対する耐性の高低による人格特性を検討し、耐性が高過ぎる場合も分裂気質との親和性が高く問題がみられることを示した
7. 登校拒否児に対する断行訓練法の効果	単独	1989年8月	東北心理学会 第43回大会	自己主張できずに不登校状態を示していた中学生に、断行訓練（アサーティブ・トレーニング）を試行し改善が見られた事例から、技法の効果を検討
8. 身障施設入所者の臨床心理学的考察（1）	単独	1990年8月	東北心理学会 第44回大会	施設入所時の心理判定結果を分析し、身体障害者の心理的問題について考察
9. 身障施設入所者の臨床心理学的考察（2）	単独	1991年8月	北海道・東北合同心理学会 第7回大会	身体障害者の示す心理的問題について、カウンセリング事例を通して援助の方法や問題点について考察
10. 養護施設入所児の学級内地位に関する考察	共同	1991年8月	北海道・東北合同心理学会 第7回大会	養護施設入所児の学校適応について学級内地位を指標として調査し、属性や心理的特徴との関連を考察
11. 日常生活場面での役割選択と性格特徴の関連について	単独	1995年8月	東北心理学会 第48回大会	短大生を対象に、役割行動と社会適応の関連性について調査し、性格特徴との関連性も含めて考察

12. 児童相談所からみた家族問題	単独	1997年9月	日本家政学会家族関係部会 シンポジウム第17回セミナー	事例分析により、その背景として認められた現代家族の孤立化や家族サポートシステムの脆弱さと、社会変化の中での家族援助として、コミュニティー心理学的援助やコーディネート機能の必要性を考察
13. 自己決定能力を育てる性の指導	単独	1998年8月	全国性教育研究団体連絡協議会 第28回全国性教育研究大会	生殖器教育に偏りがちな性教育に対し、自己決定の問題として性教育を捉え直し、そのために必要な情報処理能力との関わりの中で検討
14. 給食を食べられない2例	共同	2001年8月	第19回 小児心身医学会	給食を食べることができなくなった児童の2事例を通して、神経症的食行動異常の臨床的支援の方策に浮いて検討
15. 医師の判断が分かれた不登校女子高校生のロールシャッパ反応	単独	2002年6月	日本臨床心理士資格認定協会 第39回臨床心理士研修会	精神分裂病か神経症か医師の判断が分かれた不登校女子高校生にロールシャッパ・テストを施行し、臨床心理学の観点から病態水準と援助方略について示した
16. 特別支援教育に対する小中学校教員の意義に関する調査研究	単独	2004年8月	日本自閉症スペクトラム学会第3回大会	特別支援教育が始まり、一般の教員が普通学級で対象児童生徒を教育していく上での問題点を、教員の意識を中心に調査を行った結果を報告した。
17. クライアント・セラピストの関係性から催眠臨床を考える催眠臨床関係学の試み	共同	2004年9月	日本催眠医学心理学会第50回記念大会	催眠現象を被催眠者の側の要因だけとは考えずに、催眠者と被催眠者の関係性に焦点を当てて考察した。
18. プリーフェレ [®] における「見たて」をどのように行うか	単独	2005年8月	日本ブリーフサイコセラピー学会第15回大会	ブリーフセラピーにおけるケースの見たてについて、個人内システムの見たてから、環境との関係性を踏まえた社会システムの見たての必要性について事例を基に報告した。
19. 激しい頭痛を訴える男子中学生に対する援助事例	単独	2005年9月	日本催眠医学心理学会第51回田沢湖高原大会	頭痛のため不登校状態を示していた中学生に対して、催眠法を用いて症状除去を行い再登校に結びつけた事例を、催眠による症状除去効果のみならず、クライアントの催眠体験過程に焦点を当てて考察した。
20. 仙北市スクールカウンセラー(SC)の実践活動 ～地域支援とチームアプローチの視点から～	共同	2007年4月	日本精神衛生学会主催MCRT(心理的危機介入チーム)第2回全国研究集会(秋田)	スクールカウンセリングにおける器機介入について、事例を基に学校とカウンセラーとの協働について検討した。
21. 催眠下の体内時計イメージを用いた生活リズムの改善事例	単独	2008年7月	日本催眠医学心理学会事例研修会	被虐待経験を持つ大学生の生活リズムの改善に、催眠法を用いた事例を報告し、トラウマに触れずに主訴を解消することの意味を考察した。
22. クライアントの語る理想像を利用した催眠下エンパワーメント法について～不登校児童の事例から～	共同	2008年11月	日本催眠医学心理学会第54回大会	不登校状態を示す小学生に対し、彼が面接場面に持ち込んだイメージを催眠に利用して短期間に改善した事例に基づき、援助資源の意味について考察した。
23. 催眠誘導前の説明が催眠体験へ及ぼす影響の一考察	共同	2009年11月	日本催眠医学心理学会第55回大会	催眠誘導において、催眠前の説明の影響性について、実験法を用いて検討した。
24. あえてクライアントを困らせる ～困難事例への効果的対応～	単独	2011年11月	日本ブリーフサイコセラピー学会 第21回秋田大会	ビジタータイプのクライアント関係をカスタマー関係に変えるために、あえてクライアントに困っていただくことの臨床的意義を事例を基に考察した。
25. アスペルガー症候群の青年への心理支援	共同	2011年11月	日本ブリーフサイコセラピー学会 第21回秋田大会	発達障害の中のアスペルガータイプのクライアントへの心理支援の工夫と課題について、事例から考察した。
26. システム変化の手段として心理療法を利用することの意義について ～不登校児童の事例を通して～	共同	2011年11月	日本ブリーフサイコセラピー学会 第21回秋田大会	心理療法をその技法の治療機序とは別に、関係性の変化のために用いることの臨床的意義を、ナラティブの立場から考察した。

27. 児童養護施設職員の子ども理解ー心理検査の結果のフィードバックを受けての変化ー	共同	2011年12月	第27回日本精神衛生学会大会	児童養護施設で、心理職が心理検査結果を職員にうまくフィードバックすることで、職員の視点が児童のリソースにも向くようになり、児童への関わり方にも変化が起きることを検討した。
28. 家族全体とセラピストがビジター関係であるケースへのアプローチ	共同	2012年8月	日本ブリーフサイコセラピー学会 第22回神戸大会	特定の家族成員とセラピストの関係がビジターであっても、他の成員との関係がカスタマーか少なくともコンプレイナントであればケースは動くが、すべての家族成員との関係がビジターであるケースに対して、いかに介入していくかを、ケースを通して検討した。
29. 内発的動機づけの低いクライアントへの認知行動療法 ～高校生の不登校事例を通じて～	共同	2012年8月	日本ブリーフサイコセラピー学会 第22回神戸大会	やる気が起きない高校生に対して、認知行動療法を用いて外発的動機付けから内発的動機付けへつなげていく工夫について、不登校事例を通して検討した。
30. 児童養護施設における心理検査の活用に関する一考察 ー検査結果のフィードバックによる職員の児童解を指標としてー	共同	2012年9月	日本心理臨床学会 第31回秋季大会	児童養護施設で、心理職が心理検査結果をどのように職員にフィードバックすることが、職員の児童の児童理解に変化を起こすか検討した。
31. 絵本の読み聞かせによる母親の育児不安低減効果の研究	共同	2012年11月	日本心理臨床学会 第32回秋季大会	絵本の読み聞かせが、母親の育児ストレスをいかに軽減するか、実験的方法によって明らかにした。
32. 臨床現場における配慮と工夫。それが生まれるところ	共同	2013年8月	日本ブリーフサイコセラピー学会第15回大会 23回東京駒澤大会	大会企画シンポジウムのシンポジストとして発表した。
33. 教師と効果的にコラボレートする秘訣 ～アドバンス文化へのジョイニングとエクステンド文化への誘い～	共同	2013年8月	日本ブリーフサイコセラピー学会第15回大会 24回東京駒澤大会	大会主催ワークショップの講師を担当した。
34. 診療に役立つ認知行動療法	単独	2014年7月	日本小児科医会研修会 公益社団法人日本小児科医会 第16回「子どもの心」研修会	小児科診療で使える認知行動療法について発表した。
35. 思春期心性の理解と支援	単独	2014年9月	日本小児歯科学会 第29回 関東地方会大会	学会の招待講演の演者として思春期申請について講義した。
36. 虐待が生じる家族の心理と援助の基本	単独	2015年3月	関東子ども精神保健学会 第12回学術集会	児童虐待が生じる家族的な背景について、家族心理学の立場から発表を行った。
37. 歯は口ほどに物を言い ～口の中に映る家族の風景～	単独	2015年9月	日本小児歯科学会 第30回関東地方会大会・総会	紀要論文26のものになる発表。
38. 家族カウンセリングの理論と実践	単独	2016年9月	公益社団法人日本小児科医会 第4回「子どもの心」研修会	一般診療に必要な家族カウンセリングについてその理論と実践に関する発表を行った。
39. 乳児期から学童期までの心の発達について	単独	2017年10月	公益社団法人日本小児科医会 第6回「子どもの心」研修会	一般診療に必要な心の発達について、その理論と実践に関する発表を行った。

40. 学校保健の担い手である養護教諭がスクールカウンセラーに期待する役割の一考察	共同	2017年11月	日本心理臨床学会第36回大会	紀要論文27のもとになる発表。
(演奏会・展覧会等) 1.				
(招待講演・基調講演) 1. 教育医療福祉関係者研修会 ～子どもの心の健康を支援するには～ (基調講演)	単著	2008年3月	平成19年度 秋田県山本地域自殺予防連絡協議会、しらかみふれあいネット活動報告書、64-72頁	
2 基調講演：しあわせライフはオープンな家庭から	単著	2010年2月	白岡フォーラム実行委員会、みんなで子育て・白岡フォーラム記録集、4-12頁	
3 診療に役立つ認知行動療法	単著	2014年7月	一般社団法人日本小児科医会研修会において招待講演を行った。講演集、65-70頁	
4 思春期心性の理解と支援	単著	2014年9月	日本小児歯科学会第29回関東地方大会において、招待講演を行った。小児歯科臨床第20巻第2号 59 - 63頁	
5 一歩踏み込んだ他機関連携をするためのコツ	単著	2018年12月	平成30年度母子保健指導者養成研修会『子どもの心の診療医』養成研修 厚生労働省 121-130頁	
6 家庭教育支援のための相談スキル	単著	2019年2月	平成30年全国家庭教育支援研究協議会 基調講演 文部科学省	
7 現代社会における父性	単著	2019年11月	第38回茨城県母性衛生学会 特別講演	
8 医療職に求められるコミュニケーション力	単著	2020年11月	一般社団法人関東連合産科婦人科学会 第140回学術集会『指導医講習会』関東連合産科婦人科学会誌 VOL. 57 No. 3	
9 乳児期からの心の発達 ～その課題とかわり方～	単独	2019年5月	公益社団法人日本小児科医会『第21回「子どもの心」研修会前期講演』	報告書23のもとになる発表。
10 家族心理学 ～システムとしての家族の捉え方とその支援～	単独	2022年11月	公益社団法人日本小児科医会『第21回「思春期の臨床講習会」講演』	
11 妊産婦の自己決定を支えるために	単独	2022年11月	第41回茨城県母性衛生学会 特別講演	
(受賞(学術賞等)) 1.				

研 究 活 動 項 目						
助成を受けた研究等の名称	代表, 分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択)						
1.						
(競争的研究助成費獲得(科研費除く))						
1.						
(共同研究・受託研究受入れ)						
1. 虐待の援助法に関する文献研究Ⅰ	分担者	受託研究	2005年度	厚生労働省	70000円	日本における児童虐待について、文献をもとに検討し、著作10「日本の子ども虐待」にまとめて報告した
2. 虐待の援助法に関する文献研究Ⅱ	分担者	受託研究	2006年度	厚生労働省	70000円	
3. 虐待の援助法に関する文献研究Ⅲ	分担者	受託研究	2007年度	厚生労働省	30000円	
(奨学・指定寄付金受入れ)						
1.						
(学内課題研究(共同研究))						
1. ブリーフセラピー・モデルによる特別支援教育	代表	共同研究	2005年度	文教大学	196000円	著作6「軽度発達障害へのブリーフセラピー」において報告
2. ブリーフセラピー・モデルによる児童養護施設での被虐待児支援	代表	共同研究	2006年度	文教大学	250000円	著作22「日本の子ども虐待 第2版」において報告
3. 児童養護施設における被虐待児支援への臨床心理士の役割に関する研究Ⅰ	代表	共同研究	2007年度	文教大学	166000円	
4. 児童養護施設における被虐待児支援への臨床心理士の役割に関する研究Ⅱ	代表	共同研究	2008年度	文教大学	227000円	
5. 児童養護施設における被虐待児支援への臨床心理士の役割に関する研究Ⅲ	代表	共同研究	2009年度	文教大学	177000円	
(学内課題研究(各個研究))						
1. 児童福祉臨床における児童虐待への対応Ⅰ	代表	共同研究	2005年度	文教大学	230000円	学会発表24「あえてクライアントを困らせる」、27「児童養護施設職員の子ども理解」などで発表
2. 児童福祉臨床における児童虐待への対応Ⅱ	代表	共同研究	2006年度	文教大学	230000円	
3. 児童福祉臨床における児童虐待への対応Ⅲ	代表	共同研究	2007年度	文教大学	230000円	
4. 心理臨床における困難事例への対応Ⅰ	代表	共同研究	2008年度	文教大学	230000円	
5. 心理臨床における困難事例への対応Ⅱ	代表	共同研究	2009年度	文教大学	230000円	
(知的財産(特許・実用新案等))						
1.	—			—	—	